女子学生におけるネガティブな出来事に対する原因帰属

― 対処方法，自己効力感，問題解決スタイルとの関係 ―

三　宅　幹　子

大学生女子 163 名を対象に，場面想定法を用いて，ネガティブな出来事に対する原因帰属，対処方法，自己効力感，および問題解決スタイルの間の関係を検討した。原因帰属，対処方法，自己効力感，問題解決スタイルの間の相関関係の分析に加えて，クラスター分析を用いた原因帰属の分類に基づくタイプ間の比較により，各タイプの特徴を記述し，各要因間の関係，および，どのような原因帰属のタイプを示す群が存在するかを検討した。

［キーワード　原因帰属，対処方法，問題解決スタイル］

本研究では，大学生女子を対象として，日常的に大学生活の中で経験するようなネガティブな出来事に対する原因帰属と，それへの対処方法，自己効力感，および問題解決スタイルとの関係について検討することを目的とする。

原因帰属とは，身の回りに起こるいろいろな出来事や，自己あるいは他者の行動に関して，その原因を推論することをいうが，Wong and Weiner（1981）によれば，われわれは，意外な経験をしたり，何かの課題に失敗したり，あるいは自分にとって重要な出来事を経験したときには，より積極的にその原因を求めるという。浦（1991）の言うように，そもそも原因帰属とは，将来の出来事を予測・統制し，環境によりよく適応するためのものであり，そうした意味で，ネガティブな出来事に対する原因帰属は，そうでない出来事についての原因帰属よりも本人の今後の環境適応にとってよりクリティカルなものであるといえよう。

さて，これまでにも，ネガティブな出来事への原因帰属，対処方法，自己効力感等の変数間の関係については，三宅（2002a, 2002b）などで検討を重ねてきたが，本研究では，それらにおいて可能性の示唆されている，より多くの帰属因を想定する効果について，特に焦点を当てて検討したい。

すなわち，三宅（2002a）では，table 1に示すネガティブな出来事を提示し，それに対する帰属を10この帰属因（能力，努力，課題の困難さ，運，取り組み方，担当教官，興味，体調，時間，やる気）について評定させるという場面想定法を用いて，ネガティブな出来事に対する原因帰属を測定し，クラスター分析を用いて原因帰属のタイプ分類を行った。その結果，比較的多くの帰属因を想定するタイプが見いだされ，このタイプの特徴として，積極的

な問題解決スタイルや比較的多様な対処方法をとろうとする点が示された。また，同様の分析を6つの帰属因（能力，努力，課題，取り組み方，運，教官）への評定に基づいて行った三宅（2002b）でも，比較的多くの帰属因を想定するタイプが見いだされており，そのタイプの特徴として，比較的多様な対処方法をとろうとすること，自己効力感が高いことが示されている。

そこで本研究では，三宅（2002a）と同じ方法を用いて，女子大学生を対象に，再び上記のような結果が示されるかどうかを検討する。

方 法

調査参加者

女子大学生163名（平均年齢は20.9歳）が調査に参加した。

調査の実施方法

場面想定法を用いた，無記名式の質問紙形式の調査を講義時間中に集団で実施した。調査は2001年の12月（82名に実施）と2002年の10月（81名に実施）に行い，所要時間は約10分間であった。

質問紙の構成

質問紙の構成は，問題解決スタイルを測定するための問題解決スタイル調査項目（Problem-Solving Inventory ; PSI）の下位尺度と，ネガティブな出来事を説明する文章とその場面についての評定項目（原因帰属，対処方法，自己効力感，出来事の重要性）からなる場面想定法1セットであった。それぞれ，以下のようになっていた。

問題解決スタイルの測定項目　Heppner & Petersen（1982）が開発した社会的問題解決のスタイルを測定するための尺度（問題解決スタイル調査項目；Problem-Solving Inventory ; PSI）から，積極的な問題解決のスタイルを測定する下位尺度である「接近―回避スタイル」（18項目）を用いた。項目は，丸山（1995）によるD'Zurilla（1986）の邦訳を一部修正した，杉浦（2001）のものを使用した（項目例：「複雑な問題にぶつかったとき，何が問題なのかその本質を明らかにするために情報を集める戦略を立てる」，「問題を解決した後で，何がうまくいき，何がうまくいかなかったのか分析をする」）。「非常にあてはまる(6)」から「全くあてはまらない(1)」までの6段階で評定を求めた。

ネガティブな出来事を説明する文章とその場面についての評定項目　大学生が日常生活において経験する可能性の高いネガティブな出来事として，重要なレポートに低い評価をつけられる場面（Table 1に示す）を文章で提示し，自分がこの場面に直面していることを想定しながら読み，その後に続く原因帰属，対処方法，自己効力感，出来事の重要性のそれぞれの評定項目への評定を求めた。

原因帰属の評定項目　Hayamizu (1997), 荒木 (2000), 荒木・大橋 (2001) を参考に,「①能力が足りなかった」,「②努力が足りなかった」,「③自分にとってはレポートの課題が難しかった」,「④運が悪かった」,「⑤レポートへの取り組み方が悪かった」,「⑥担当教官が悪かった」,「⑦レポートのテーマに対する興味がなかった」,「⑧体調が悪かった」,「⑨時間が足りなかった」,「⑩やる気がでなかった」の 10 項目を提示し, 場面のようになった原因としてそれらの項目がそれぞれどの程度影響していると思うか,「非常に影響している(5)」から「全く影響していない(1)」までの5件法で評定を求めた。

対処方法の評定項目　Hayamizu (1997) を参考に,「①なにか, 気晴らしになることをする」,「②次回のレポートが課されたら, レポートをしあげるのに, 今回よりもっと努力することにする」,「③今後, このようなレポートが課される講義は, なるべく選択しないようにする」,「④次回のレポートにはどう取り組んだらいいか, 対策を良く考える」,「⑤評価が低かった理由をはっきりさせようとする」,「⑥嫌なことなので, あまり深く考えないようにする」の6項目を提示し,「非常にそうすると思う(5)」から「全くそうすると思わない(1)」までの5件法で評定を求めた。①, ③, ⑥は比較的消極的な対処方法であり, ②, ④, ⑤は比較的積極的な対処方法である。

自己効力感の評定項目　説明文のような場面について,「次回また, 同じようなレポートが課されたら, あなたはうまくやれると思いますか」との項目に,「非常にそう思う(5)」から「全くそう思わない(1)」までの5件法で評定を求めた。将来, 同様の場面に直面した際にどの程度うまくやれると思うかを問う項目である。

出来事の重要性の評定項目　説明文のような場面について,「どの程度深刻であると思いますか」との項目に,「非常にそう思う(5)」から「全くそう思わない(1)」までの5件法で評定を求めた。

Table 1　場面想定法で用いた, ネガティブな出来事を説明する文章

必修の授業の成績に影響する重要なレポートが返却された. 自分のレポートの評価は低く "C" であった。まわりの友達は, ほとんど "A" であり, 彼らの評価と比べてみても, 自分のレポートの評価は, かなり低かった。

結　果

各評定値は, 厳密には順序尺度上の数値であるが, 便宜的に間隔尺度上の数値とみなして, 以下の分析を行う。

原因帰属については, 三宅 (2006) において, 本研究と同じ原因帰属の評定項目に対する

大学生男女253名の評定データについて実施した因子分析の結果（Table 2に示す4因子を抽出,「⑦レポートのテーマに対する興味がなかった」は複数の因子にまたがって負荷していたため削除）に基づき，各因子に負荷する項目の評定値の平均値を因子得点とし，以後の分析に用いた。なお，調査参加者のうち出来事の重要性の評定項目で「わりとそう思う(3)」以上に評定した113名（平均年齢は20.9歳）のデータを抽出して，これ以降の分析の対象とした。

Table 2　原因帰属項目に対する因子分析結果（N=253）

因　子	項　目	因子負荷量[a]
F1 統制可能要因	⑤レポートへの取り組み方が悪かった	.87
	②努力が足りなかった	.83
	⑩やる気がでなかった	.55
F2 外的要因	④運が悪かった	.83
	⑥担当教官が悪かった	.78
F3 偶発的要因	⑧体調が悪かった	.82
	⑨時間が足りなかった	.80
F4 能力要因	①能力が足りなかった	.87
	③自分にとってはレポートの課題が難しかった	.77

[a] 各因子への負荷量を示す。

原因帰属と対処方法，自己効力感，問題解決スタイルとの関係

原因帰属の各因子，対処方法，自己効力感，および問題解決スタイルの評定値の平均値と標準偏差をTable 3の上端および左端に，また，原因帰属の各因子と，対処方法，自己効力感，問題解決スタイルとの間の相関係数をその内側に示す。

原因帰属と対処方法との関係については，F3偶発的要因に帰属するほど積極的な対処方法をとろうとする傾向，F4能力要因に帰属するほど消極的対処方法をとろうとする傾向がみられた。また，F2外的要因に帰属しているほど，消極的対処方法の「③選択しない」，「⑥考えない」を選ぶ傾向があった。さらに，これらの傾向に加えて，F1統制可能要因へ帰属するほど「③選択しない」という消極的対処方法をとる傾向もみられた。

原因帰属と自己効力感の間の関係については，F3偶発的要因に帰属するほど自己効力感は高い傾向がみられたが，それ以外には統計的に有意な相関関係はみられていない。

原因帰属と問題解決スタイルとの間の関係については，統計的に有意となるほどの関係は示されなかった。

Table 3　原因帰属と対処方法，自己効力感，問題解決スタイルの相関係数（N=113）

		原因帰属			
		F1 統制可能	F2 外的	F3 偶発的	F4 能力
		[3.8(0.8)]	[2.2(0.8)]	[2.8(0.9)]	[3.2(0.8)]
積極的対処方法					
②もっと努力	[4.0(0.9)]	.09	-.07	.22*	.07
④対策	[3.2(1.1)]	.09	.08	.22*	.06
⑤理由をはっきり	[2.9(1.2)]	-.06	.16+	.22*	.07
消極的対処方法					
①気晴らし	[3.2(1.1)]	.09	.06	.15	.20*
③選択しない	[2.3(0.9)]	.26*	.28*	.17	.33*
⑥考えない	[2.8(1.1)]	-.04	.20*	-.12	.13
自己効力感	[3.0(0.9)]	.16	.01	.28*	-.10
問題解決スタイル	[70.7(10.1)]	.11	.17+	.17+	.02

[　]内は，平均値（SD）であり，原因帰属と対処方法，自己効力感のレンジは1～5，問題解決スタイルのレンジは18～108。

+ p<.10, * p<.05。

原因帰属タイプと対処方法，自己効力感，問題解決スタイルとの関係

原因帰属のタイプ分類　原因帰属の4因子の因子得点に基づいてクラスター分析（ウォード法）を行い，併合過程（デンドログラム）から，4クラスター（CL1，CL2，CL3，CL4とする）をタイプ分類の基準として採用した。それぞれの人数，および原因帰属の因子得点の平均値をTable 4の上部に示している。さらに，各クラスターの特徴をわかりやすくするために，因子得点を標準化した値（標準得点）の平均値をFigure 1に示す。

それぞれの特徴をまとめると，CL1は，F1統制可能要因とF4能力要因では中間点（3）に達しているが，相対的にみると，どの要因にもさほど強く帰属しているわけではないタイプの群であるといえる。次に，CL2は，F3偶発的要因においてのみ中間点（3）に達しており，どの要因にもあまり強く帰属してはいない。相対的にみれば，F2外的要因，F3偶発的要因に比較的強く帰属する傾向があるといえよう。さらに，CL3は，F1統制可能要因への帰属が極端に強い群である。F3偶発的要因への帰属も比較的強いが，一方で，F2外的要因，F4能力要因への帰属は，群間で最も低い。ネガティブな出来事の理由を，取り組み方や，努力や，やる気の不足として捉えており，能力や運や教官などの外部には帰属しないタイプの群である。最後に，CL4は，F1からF4までいずれにおいても，群間でほぼ最高に近い得点を示しており，さまざまな要因を原因として想定している群であるといえる。

Table 4 クラスター（CL）別の原因帰属，対処方法，自己効力感，問題解決スタイルの平均値（（ ）内は *SD*）

	CL1 (n=29)	CL2 (n=17)	CL3 (n=17)	CL4 (n=50)	$F_{(3, 109)}$	多重比較
原因帰属						
F1 統制可能	3.4(0.4)	2.7(0.6)	4.5(0.3)	4.1(0.5)	63.99*	3 >4 >1 > 2
F2 外的	1.9(0.6)	2.6(0.6)	1.5(0.5)	2.6(0.9)	12.39*	2, 4 > 1, 3
F3 偶発的	1.9(0.6)	3.1(1.1)	3.1(0.9)	3.0(0.7)	15.06*	2, 3, 4 >1
F4 能力	3.0(0.6)	2.9(0.4)	2.3(0.5)	3.7(0.7)	23.00*	4 >1, 2 >3
積極的対処方法						
②もっと努力	3.8(1.0)	3.8(0.7)	4.3(0.8)	4.1(0.8)	1.36	
④対策	2.9(1.0)	2.9(0.8)	3.1(1.2)	3.4(1.1)	1.45	
⑤理由をはっきり	2.7(1.0)	3.2(1.2)	2.9(1.4)	3.0(1.2)	0.55	
消極的対処方法						
①気晴らし	3.0(1.2)	3.0(1.0)	3.1(1.1)	3.5(1.1)	1.50	
③選択しない	2.2(0.8)	2.2(1.0)	1.9(0.9)	2.6(0.9)	2.79*	4 > 1, 3
⑥考えない	2.9(1.3)	2.9(1.2)	2.4(1.0)	2.9(1.0)	1.12	
自己効力感	2.8(0.8)	2.8(0.8)	3.4(0.9)	3.1(0.8)	2.71*	3 > 1, 2
問題解決スタイル	69.4(12.6)	69.7(7.6)	70.8(10.5)	71.7(8.9)	0.38	

原因帰属と対処方法，自己効力感のレンジは1～5，問題解決スタイルのレンジは18～108。多重比較はLSD法による。$^{+}p<.10$, $^{*}p<.05$

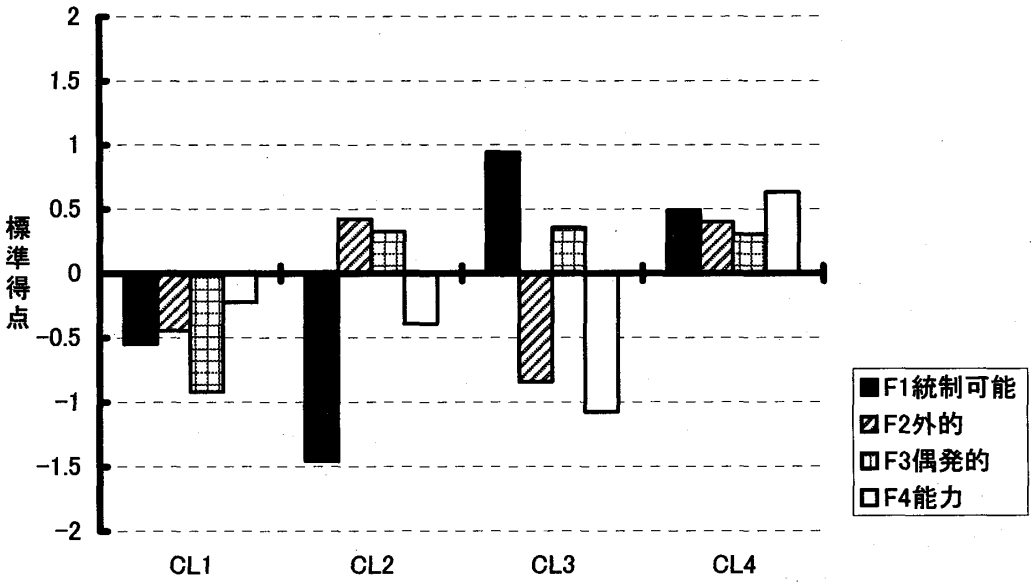

Figure 1 各クラスター（CL）の原因帰属因子得点（標準得点化済み値）

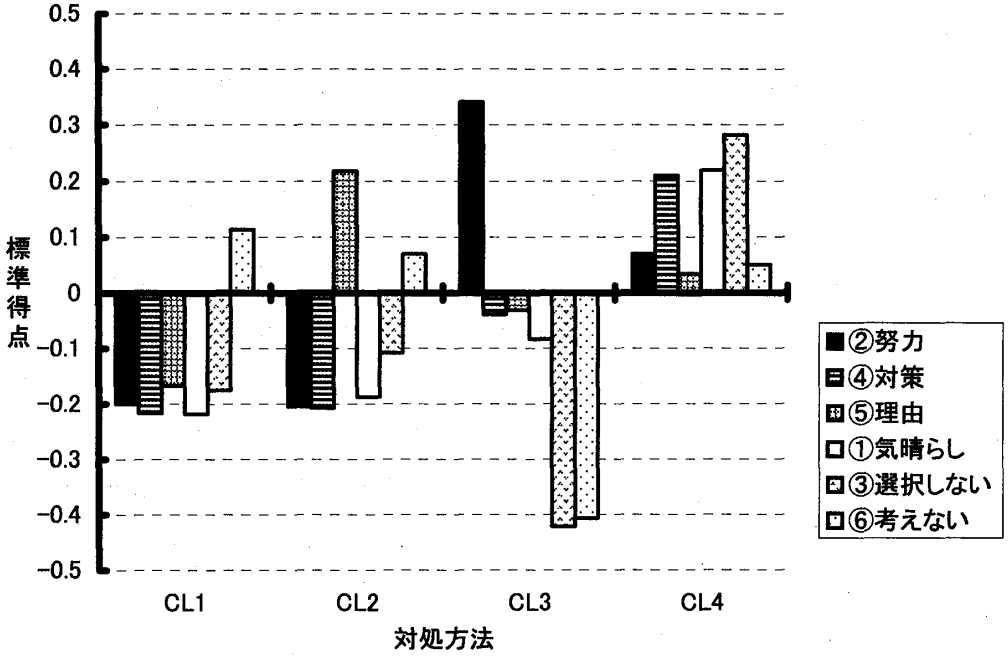

Figure 2 各クラスター(CL)の対処方法評定値(標準得点化済み値)

原因帰属タイプと対処方法，自己効力感，問題解決スタイルとの関係　クラスターごとの対処方法，自己効力感，問題解決スタイルの平均値を Table 4 の下半分に示す。また，対処方法については，Figure 2 に評定値を標準化した値（標準得点）の平均値を図示している。

対処方法の評定値をみると，すべてのクラスターにおいて，一貫して「②もっと努力」の評定値が最も高い。また，すべてのクラスターにおいて，消極的対処方法の中の「③選択しない」は最も評定値が低い。

各クラスターの対処方法の平均値を比較してみると，すべての対処方法を通じて比較的評定値が高いのは，CL4 である。CL4 では，積極的対処方法においても，消極的対処方法においてもほとんどどのクラスターよりも高い評定値を示しており，さまざまな対処方法をとろうとする群であるといえる。それに対し，CL3 は，積極的対処方法では比較的高めの評定値となる傾向があるのに対し，消極的対処方法では低い評定値となる傾向がみられる。残りの CL1 と CL2 については，「③理由をはっきり」の 1 項目を除いて，両群ともほぼ大差ない評定値となっており，いずれの対処方法についても他クラスターよりも特に高い評定値を示すものはみあたらない。相対的にみれば，積極的な対処方法では CL3 や CL4 に比べて低く，消極的な対処方法では，CL4 と CL3 との中間といったところである。

平均値の差の検定（一要因分散分析，LSD 法による多重比較）の結果（Table 4 の右端を

参照)，統計的に差が有意であったのは，「③選択しない」におけるCL4とCL1，CL3との間の差のみであった。

同様に，各クラスターの自己効力感と問題解決スタイルについて平均値を比較してみると，自己効力感において群間差が有意で，多重比較の結果CL3は，CL1とCL2よりも自己効力感が有意に高かった。問題解決スタイルについては，群間で平均値にはほとんど違いが見られず，その差は統計的にも有意でなかった。

統計的な差はあまり示されなかったが，各群の特徴をやや強調して，原因帰属タイプと併せて簡潔にまとめると以下のようになる。まずCL1は，特に高く帰属する要因は無いものの，強いて言えばF4能力要因への帰属傾向が高いタイプであるが，対処方法においては全体的に評定値は低めで，相対的にみた場合「⑤理由をはっきり」においては特に低い。能力不足への帰属傾向を持つ群にとって，そういった理由をはっきりとさせることは精神的苦痛を伴うことであり，低くなっていることもうなずける。次にCL2は，特に高く帰属する要因は無いが，相対的にはF2外的要因，F3偶発的要因に対して高めとなる傾向がある。対処方法も特に高く評定しているものはないが，「⑤理由をはっきり」においてのみ群間で最も高い評定値を示している。CL3は，F1統制可能要因，F3偶発的要因へ高く帰属し，F2外的要因，F4能力要因には帰属しない群である。対処方法においては，積極的対処方法は高めで，消極的対処方法は低めである。CL4は，さまざまな要因を原因として想定し，さまざまな対処方法をとろうとする群であるといえる。

考 察

本研究では，大学生女子を対象として，日常的に大学生活の中で経験するようなネガティブな出来事に対する原因帰属と，それへの対処方法，自己効力感，および問題解決スタイルとの関係について検討することを目的としていた。

原因帰属と対処方法，問題解決スタイルとの関係

原因帰属と対処方法，自己効力感，問題解決スタイルの相関係数の分析からは，まず，F3偶発的要因としてまとめられている「⑧体調が悪かった」や「⑨時間が足りなかった」への帰属が積極的な対処方法や自己効力感の高さと関連していることが示された。また，F4能力要因，F2外的要因への帰属が消極的対処方法と関連していること，F1統制可能要因への帰属が「③選択しない」という消極的対処方法と関連していることが示された。

これらの点は，三宅（2000）において，男子大学生では，ネガティブな出来事を内的で統制可能な要因に帰属することが自己効力感の高さや積極的な対処方法の選択につながる傾向が示唆されている点とはかなり異なっており，また，Forsyth & McMillan（1981）における，内的で統制可能な要因への原因の帰属はその後の達成期待の高さと強く関係しており，

外的で統制不可能な要因への原因の帰属は，以後の期待を低めることと関係していたという結果とも異なる傾向である。この点については，ジェンダーを含む文化的要因の影響が多分に考えられ（たとえば，Beyer（1999/1998）の示している原因帰属における性差），国内外の研究結果の比較や，原因帰属の性差についてのデータを蓄積することにより，さらに詳細に検討していく必要がある。

原因帰属タイプと対処方法，自己効力感，問題解決スタイルとの関係

クラスター分析による原因帰属タイプの分析では，調査参加者は次の４タイプ（クラスター）に分類された。すなわち，F4 能力要因への帰属傾向が強めである CL1，F2 外的要因，F3 偶発的要因への帰属傾向が強めである CL2，F1 統制可能要因，F3 偶発的要因へ高く帰属し，F2 外的要因，F4 能力要因には帰属しない CL3。さまざまな要因を原因として想定する CL4 であった。

そして，各タイプの特徴を踏まえて，タイプ間で違いがみられた，対処方法，自己効力感との間の関係を考察してみると，概して，F4 能力要因への帰属傾向をもつタイプ，および，F2 外的要因と F3 偶発的要因への帰属傾向をもつタイプは，消極的な対処方法をとる傾向があり，自己効力感は低めとなる傾向がみられる。それに対し，F1 統制可能要因と F3 偶発的要因への帰属傾向をもつタイプ，および様々な要因へ帰属する傾向をもつタイプは，いずれも自己効力感が高い傾向にあった。そしてそのうち前者は，積極的対処方法をとろうとする傾向が特に強く，後者は，積極的対処方法，消極的対処方法のいずれについても，とろうとする傾向が高めである。能力への帰属や自己外への帰属がその後の達成期待を低めること，および，ネガティブな出来事も，自己の統制可能な要因に帰属することで，将来の達成期待を高く保てる（低めない）可能性については，これまでにも三宅（2000）などにおいて述べてきたが，そうした知見と一致する傾向であるといえる。さらに，CL4 が再び分類されたことにより，三宅（2002a, 2002b）でみられた“比較的多くの帰属因を想定するタイプ”の存在が確認された。このタイプの特徴として，高い自己効力感や比較的多様な対処方法をとろうとする傾向が示され，この点も整合している。

本研究の結果は，大学生女子における，ネガティブな出来事に対する原因帰属，対処方法，自己効力感，問題解決スタイルの関係についての一つの資料を提供するものであるが，その解釈においては，さらなる研究を要する部分が大きい。ジェンダーを含む文化的要因の影響については，男性データとの比較をはじめとして，データの蓄積と慎重な検討が必要であろう。また，本研究では，はっきりとした結果の示されなかった原因帰属と問題解決スタイルとの間の関係の解明も課題として残る。そして，本研究で確認された，多様な要因へ帰属する傾向をもつタイプ（CL4）の特徴についても，原因帰属と対処方法，自己効力感との関係にとどまらず，多面的に明らかにしていき，そのような認知傾向を持つことの意味（たとえば，精神的健康におよぼす影響）を探ることも非常に興味深い。

引用文献

荒木由紀子　2000　原因帰属の多様性が学習性無力感に与える効果について　日本教育心理学会第42回総会発表論文集，366.

荒木由紀子・大橋智樹　2001　中学生における学習性無力感と帰属因の多様性との関連性　日本心理学会第65回大会発表論文集，647.

Beyer, S.　1999/1998　Gender differences in causal attributions by college students of performance on course examinations. *Current Psychology: Developmental Learning Personality Social, Winter*, 17, 346-358.

D'Zurilla, T. J.　1986　*Problem-solving therapy: A social competence approach to clinical intervention.* New York: Springer Publishing Company.　丸山　晋（監訳）1995　問題解決療法―臨床的介入への社会的コンピテンス・アプローチ―　金剛出版

Forsyth, D. R. & McMillan, J. H.　1981　Attributions, affect, and expectations: A test of Weiner's three-dimensional model. *Journal of Educational Psychology*, 73, 393-403.

Hayamizu, T.　1997　Between intrinsic and extrinsic motivation: Examination of reasons for academic study based on the theory of internalization.　*Journal of Psychological Research*, 39, 98-108.

Heppner, P. P. & Petersen, C. H.　1982　The development and implications of a personal problem-solving inventory. *Journal of Counseling Psychology*. 29, 66-75.

三宅幹子　2002a　ネガティブな出来事に対する原因帰属―対処行動よび問題解決スタイルとの関係―　萩国際大学紀要，4(1)，1-11.

三宅幹子　2002b　ネガティブな出来事に対する原因帰属パターン―対処方法および自己効力感との関係―　日本性格心理学会第11回大会発表論文集，24-25.

三宅幹子　2003　問題解決スタイルとネガティブな出来事に対する原因帰属の関係　萩国際大学紀要，4(2)，57-66.

三宅幹子　2006　ネガティブな出来事に対する原因帰属―対処方法，問題解決スタイルとの関係(2)―　日本心理学会第70回大会発表論文集，1003.

杉浦義典　2001　ストレス事態に関する思考の制御困難性と関連する対処方略―情報回避・情報収集・解決策産出と心配―　教育心理学研究，49，186-197.

浦　光博　1991　帰属理論　蘭　千壽・外山みどり（編）帰属過程の心理学　ナカニシヤ出版　Pp. 8-37.

Wong, P. T. P. & Weiner, B.　1981　When people ask "Why" questions, and the heuristics of attributional search. *Journal of Personality and Social Psychology*, 40, 650-663.

謝辞　本研究は平成18年度科学研究費補助金(課題番号17730416)の助成を受けて行った。

Appendix

本研究で使用したProblem-Solving Inventory（PSI）の「接近―回避スタイル」の質問項目（18項目）（杉浦，2001）

- 問題がうまく解決できなかった場合に，なぜうまく行かなかったのかその原因を調べる
- 複雑な問題にぶつかったとき，何が問題なのかその本質を明らかにするために情報を集める戦略をたてる
- 問題を解決した後で，何がうまくいき，何がうまくいかなかったのか分析をする
- 何らかの活動を行って問題を解決しようと試みた後で，実際の結果と，「こうなるべきだ」と自分が考えていたことを比較する時間をとる
- 問題があるときには，これ以上何もアイデアが出てこないというところまで考えて，できるだけたくさんの処理方法を考え出す
- 問題にぶつかると，自分の感情を徹底的に吟味して，問題状況において何が起きているのかを知ろうとする
- 問題が生じてまごついているとき，ぼんやりした考えや感じを，具体的または明確な言葉ではっきり言い表してみようとする
- 行く末は混乱だけなのに，立ち止まって問題を処理するための時間をとらないことがある（逆転項目）
- 問題に対するアイデアや解決策を決定するに際して，それぞれの選択がうまく行く可能性について時間をかけて考察する
- 問題に直面したときは，次のステップを決める前に問題について相談する
- 決断をするときには，それぞれの選択結果を検討し，比較する
- 個々の活動について，それを行った場合のあらゆる結果を予測するようにしている
- 問題の解決策を考え出そうとするとき，あまりたくさんアイデアを出さない（逆転項目）
- 選択肢を比較し決断をするための体系的な方法をもっている
- ある問題を処理する方法を考えようとしているとき，異なった考えを一緒に組み合わせようとする
- 問題に直面したとき，自分の環境の中でどんなものが問題の解決の役に立つか，調べないことが多い（逆転項目）
- 問題に直面したときには，まず状況を見渡し，関係のある情報をすべて考慮に入れる
- 問題に気づいたら，まず何が問題なのか正しく知ろうとする

教示：以下の項目は，普段のあなた自身にどの程度あてはまるでしょうか。1～6のうち，もっとも近いと思うものをひとつだけ選んで，数字を○で囲んでください。ここでいう問題とは，日常生活の中で生じる個人的な問題，たとえば，友人とのつきあい，進路選択といった問題のことです。

三 宅 幹 子

Causal attribution of a negative event in female undergraduates

— Relations of coping behavior, self-efficacy and problem-solving style —

Motoko MIYAKE

Relations of causal attribution for a negative event and coping behavior, self-efficacy, problem-solving style were examined. 163 female undergraduates were asked to imagine themselves being faced with a negative event, and rate the likelihood of ten probable causes for it, how likely they would adopt each of six coping behaviors, their self-efficacy to deal with it next time. In addition, they filled the Problem Solving Inventory (PSI). Result showed that those who attributed the negative event more to bad condition and lack of time adopted more active coping behaviors, and showed higher self-efficacy. To examine in detail, participants were classified into 4 causal attribution types and features of these types on six coping behaviors, self-efficacy and PSI were discussed.

[Key words: causal attribution, coping behavior, problem-solving style]